

広島俳句倶楽部

令和二年一月作品集

徳山

村上正人

山口県周南市徳山港仲の大津島にある人間魚雷「回天」の特攻訓練基地の遺構を訪れた。歴史の真実に触れる散策を終え、島から眺める対岸には高度成長を支えたコンビナートが連なる。徳山港に戻ると朝五時に耀りが始まる水産物市場に徳山の日常を感じることができた。

冬風の棧橋に着く船荷かな

冬日和波音したる大津島

草河豚の遊ぶ回天基地の跡

冬の日の回天基地を鳶の舞ひ

山茶花の散り敷いてゐる小坂かな

大松の枝撓らせて北吹けり

宵星の沈んでゆけり冬木立

冬の月波打ち際を照らしたる

冴ゆる月残れる朝に魚を耀る

鰯を耀る指し子の声のよく通り

佐保光俊

鉄塔に来ては飛ぶなり初鵲
初風や奪とことん流れたる

村上正人

城濠に水引き入るる淑気かな
郵便の届く音聞く初寢覚

あざみ

宮島の海うらうらと初日かな
渡船待つ人の上飛ぶ初鵲

亜矢

初春の日を浴びてゐる獅子の背^ナ
初乗のバスの相席赤子^ニて

敬子

数の子の塩抜きをまづ済ませたる
嫁の煮る黒豆美味し老の春

暁子

初電車ほどなく海に沿ひにけり
初風の海へと向けて駅を出る

高尾ひとみ

参道の真つ正面に初日かな
初空を高く鵲の飛びにけり

ちどり

裏山の松に和紙巻く飾かな
左義長は子年生まれが火を放つ

松本恵和

初景色いつもの道の広きかな
初詣角の出でたる鹿に会ふ

美耶

去年今年きのふの景色そこにあり
初日の出山また山を照らしけり

阿姫

雨戸緑る吾に初日の差しにけり

阿波久

友達と独楽と独楽とをぶつけ合ふ

井藤希

元日の空存分の青さかな

英一

喧騒のあとの静寂や去年今年

遠藤さつき

何ひとつ変はらぬ厨今朝の春

大橋博子

結びたる三ツ葉を入れて雑煮椀

大畑恵

初詣鼠の土鈴買ひにけり

かこ

初まゐり百の石段登りきり

紀英子

元日の暮れて御堂を閉ざしたる

熊谷ゆり子

一瞬の沈黙のあり去年今年

桑門わかこ

鯉はねる音のしてをり去年今年

白神陽子

賑はひて姉妹ばかりの二日かな

新庄憲孝

お飾の穂はすぐ鳥に食はれけり

民

初春の寿ぐ言葉固なまり

ちかこ

初富士の窓全面に広がりぬ

友岡業山子

仏壇に盃供へ去年今年

樫子

初富士を坂の上より拝みたる

ふじ女

ふるさとの雑煮の運ばれてきたる

穂高

つがなし互ひに古希の年賀状

松田裕子

朝の日が縁を越えたる三日かな

幹

独り居の正月料理つましく

みさ子

グラウンドに初空を見る人のあり

宮田保江

初霞鷺の白さを見てゐたる

森口良樹

放水のアー子連ねて出初式

やす保

破魔矢持ち一団の行く薄明り

高き木に集まつてくる鶉の声

竹林を抜ければ冬の川に出て

山茶花にまた一人橋渡り来る

山茶花にしばらく人のゐたりけり

鳥一羽群に加はる雪催

いちどきに裸木に差す大朝日

花石路に久方ぶりの雨となる

数へ日の畑に人の出てをりぬ

大年の日のゆつくりと歩みけり

ときどきは赤ん坊の来る冬座敷

雨傘を干さんとせむや返り花

刈り込みし後に青木の実を付くる

数へ日のビルに響けるクラクシヨン

ピアノ漏れ聞こゆる家の冬椿

仏壇に蠟燭灯す冬座敷

枯芝を踏んで歩けり濠の端

バス通りを歩いてゐたり冬ぬくし

飲み干せしボトルに汲める寒の水

しろじろと昇つてきたり寒の月

炊き上がるごはん阪神震災忌

金柑を口にして待つ電車かな

白波の沖より寄せて琵琶の花

能登の海苔火鉢であぶり着とす

寒月の渡つてゆける樟大樹

山坂を上りてをれば雀子鳴く

チエーンソー森に響いて日脚伸び

海峡にタンカー並ぶ大旦

誰もみな黙して初日拝みけり

御納戸に小さき足音嫁が君

黒潮のうねつてゐたる野水仙

佐保光俊

村上正人

あざみ

短日のインコしきりに紙をかむ

冬満月流るる雲のかかりたる

大学の大き慰霊碑冬の空

十二月ポップコーンの弾けたる

人生論友と話して木の景髪

膝掛けをして赤ペンで採点す

冬鴈の声を聞きたく座りたる

椅子に置く折り目正しき冬帽子

青空へ母頂の声高らかに

向き合うて羽を広げて鶴鳴けり

入日影楓紅葉を照らしたる

裸木に川鵜の糞の白々と

交差点路肩に落葉積もりたる

拘置所の公孫樹落葉を掃く夫婦

冬薔薇馴染みの喫茶店す

池の面にとくに近づく冬の鯉

左脛三針縫ひし年の暮

新年や肩を患ひ床に伏し

左脛消毒に行く六日かな

自習室の窓から見えて冬の梅

山茶花の蜜吸ふ鵜の来てをりぬ

踏み台に小舟を使ひ池普請

調律師来てゐる坂の冬館

雪催路地にパン焼く匂して

宵からは本降りとなる冬至かな

柚子風呂に一枚の葉が浮いてをり

歳晩の畦に藁焼く火の見ゆる

それぞれの部屋に年の夜過ぎにけり

生垣に十は来てをり初雀

署名して折鶴貰ふ冬の橋

亜矢

敬子

暁子

鶉の声のしてゐる冬の園

鶉の竹林を出てまた戻り

石段を上がり見てゐる帰り花

万両の脇より鐘撞堂へ行く

満月の枯木桜を昇りけり

満月のはかには見えぬ冬の空

冬晴のきれいな山を見てゐる

大窓に半分掛かり冬の虹

凍雲の形を変へず行きにけり

水仙の蕾今にも咲きさうに

深山から祖父と聖樹を伐り出しぬ

一本の冬の薔薇切り母見舞ふ

石路の花母居ぬ家に戻りたる

母が家の表札の上注連飾る

退院の母のくつろぐ初湯かな

母は膝さすりて眠り冬の夜

塩振つて母が白菜漬けるたり

往診の歯医者者の来たり室の花

冬の驚橋の手摺に羽ばたいて

古書揚真上に煤の上がりけり

座り込み焚火にあたる媼かな

帰り花通りて兄の墓へ行く

紙懐炉背中に貼つて外出す

ランナーのたすきを渡す雪催

牡蠣フライへぎに盛られて売られをり

賀状書くひとりひとりの顔浮かべ

初御空先まで五重塔見上ぐ

破魔矢抱き進んでゆける車椅子

異国人スカート広げ御慶述べ

あらたまの枝に来てゐる雀かな

高尾ひとみ

ちどり

松本恵和

けふもまた眠れる山に向かひたる

窓越しに冬の満月照りにけり

帰港する船へ飛び立ち都鳥

冬菑弥山の空を染めにけり

冬の海かもめ一羽が飛んでをり

軒ごとに南天赤き実を垂れて

床の間に大王松生け年迎ふ

門を出て遠くの山に初菫

初明り棚田うつすら見え始む

人の居ぬ社に差せる初日かな

美耶

天を突く公孫樹すつかり景を落とし

冬ざれの安芸小富士に星上がる

年の暮安芸小富士の灯り見え

踏み台に乗つて御屠蘇を供へたる

国費での留学と聞く年始

阿姫

トントんとトントんと葱刻みたる

目の色のいつもと違ふ歌留多かな

阿波久

夕しぐれ紀の森に降りにけり

参道に古着を並べ年の市

護国社に去年の破魔矢を持ちゆけり

城に入る列に並びて初参

子ら皆に酒酌む母の淑気かな

公園の砂に弾める寒雀

井藤希

孫が待つえんどう豆を多く蒔く

沢庵を漬けて師走の日和かな

初稽古気合で入る錦川

英一

初富士をカメラに収め老の旅

初空に巨大クレーン伸びるたり

遠藤さつき

水鳥の水尾のしづかに広がりぬ

アメ横の人々や年の暮

水鳥のひとつ声鳴いて行きにけり

冬の月基地の真上に照りにけり

大寺の甍に来てゐる冬の鳥

冬の薔薇色鮮やかに咲きにけり

花杵飛石を踏み客の来る

水仙の庭の真中に咲いてをり

川風の冷たき橋を渡りたる

初詣みな打ち揃ひ手を合はせ

大橋博子

大畑恵

さつまいも土の上へと寝かせたる

水鳥の一群となり眠りをり

かこ

青木の実紅差し熟るるお内仏

寒月や山寺に嫁し六十年

寒紅をきりりと引いて心決む

冴ゆる月眺めてゐたる独りかな

雪降つて人それぞれの思ひかな

紀英子

参道の行く手に跳ねて初鵲

二人分珈琲を引く四日かな

熊谷ゆり子

音もなく雨の降りだす白障子

一畳の仏旗の揚がり時雨くる

冬の庭父の据ゑたる石があり

枯木立学生の声抜けてゆく

炭はぜて男ばかりの座敷なり

はの暗き御堂に居りて年迎ふ

病棟の広き廊下や日脚伸ぶ

自転車にミモザを乗せて帰りたる

桑門わかこ

独り居に師走の雨の続きをり

まづ先に仏壇に汲む寒の水

初詣母の残せし杖を突き

初みくじ小吉とあり一人笑む

水仙の膨らむ蕾探したる

白神陽子

萱うねり大山いよよ高きかな

フェリー行き波を受けたる百合鷗

下駄の歯に微塵となりし霜柱

長靴で雪を踏みしめ雪下ろす

校庭に風揚の子の集ひ来る

新庄憲彦

大根切る手際のよさよ節料理

終戦の後の春着は米となり

民

冬の蠅そつと逃がして目で追ひぬ

青空を見上げてしやばん玉を追ふ

ちかこ

耳と鼻少し冷たき夜の道

はふはふと夫は風呂吹頬張りぬ

巻き癖の少し残れる初暦

校庭に子らの玉蹴る二日かな

寒餅を搗いて昼餉としたりけり

友岡素山子

大晦日厨に出汁の匂満ち

元旦や深呼吸して窓ひらく

物干に四羽並びて初雀

床の間に日の差し込みて今朝の春

樫子

駅に見て藍の薄るる初苗

青空に門松高く城の門

一本の枝の若くて寒桜

ふじ女

届きたる伊勢海老を置く台所

孫曾孫集まりたるや大旦

宮の前礼する人の淑やかな

初東風に翻りたる絵馬のあり

通帳を広げてゐたる七日かな

小豆入れ煮こめ炊く母親驚忌

穂高

絵手紙を葉としたり初日記

ほろほろと湯豆腐の角くづれけり

流木の沖へ沖へと冬の潮

逆光の大鉄塔や冬夕焼

海辺まで一本の道枯芒

松田裕子

通勤の足元に来し寒雀

園庭に声のしてをり春隣

幹

楠の大木見上ぐ冬帽子

アパートに小さき泣き縄飾りたる

餡入りの里の雑煮を食へにけり

筆始孫と鼠を描きにけり

ビルごとに少し違ひて門の松

早朝の神社の手水鉢凍る

宮の裏残つてゐる焚火跡

社から並んで見たる冬苗

みさ子

踏みしめて石段のぼる初詣

小吉を袂に入れて明の春

門に出て賀状受け取る朝かな

亡き母の銘仙を着て梅早し

暁の隣の梅の香りたる

宮田保江

実千両活けて仏間の華やげり

曇天を低く舞ひをり冬の鶯

店掃除ホインセチアを外に出し

寒の駅貨物列車の走り過ぐ

糶箱に河豚の跳びはね南風泊

バーマ屋に予約をしたりシクラメン

水仙や父の動かぬ腕時計

森口良樹

子ら去りて積み上げられし蒲団かな

会いたいねと一筆添へて賀状書く

やす保